

| | |
|--------------|---|
| Title | 是永駿名誉教授に聞く : 大阪外国語大学の思い出 |
| Author(s) | 進藤, 修一; 菅, 真城 |
| Citation | 大阪大学世界言語研究センター論集. 2009, 1, p. 279-299 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/11124 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

是永駿名誉教授に聞く —大阪外国語大学の思い出—

進 藤 修 一・菅 真 城
SHINDO Shuichi and KAN Masaki

Emeritus Professor KORENAGA Shun and His Memories of Osaka University of Foreign Studies

Keywords : Osaka University of Foreign Studies, education and research, student life,
Integration of Osaka University and Osaka University of Foreign Studies
キーワード : 大阪外国語大学, 教育・研究, 学生生活, 大阪大学・大阪外国語大学統合

解説

大阪大学では、2005（平成17）年から名誉教授の方々に大阪大学の歴史に関する事柄についてインタビューし、その模様をビデオに収録して後世に残す事業を実施してきた。文書館設置準備室が設置された2006年からは、これを文書館設置準備室の事業として実施している。大阪大学と大阪外国語大学とは2007年10月1日に統合されたが、大阪外国語大学のあゆみも大阪大学の歴史の貴重な一齣である。この是永駿大阪外国語大学名誉教授のインタビューも、文書館設置準備室が行う名誉教授ビデオ収録の一環として、2008年9月10日に大阪大学外国語学部長室において実施された。インタビュアーは進藤修一大阪大学言語文化研究科准教授が務め、菅真城大阪大学文書館設置準備室講師が同席した。

是永名誉教授の略歴については、本文末尾をご参照いただきたい。本インタビューでは、是永名誉教授の経歴に従って、大阪外国語大学について語っていただいている。その内容は、学生時代を過ごした上本町時代、大阪外国語大学赴任後の教育・研究の実態、学長としての大学運営など多岐にわたる。

大阪外国語大学の歴史については、大阪外国語大学70年史編集委員会編『大阪外国語大学70年史』（大阪外国語大学70年史刊行会、1992年）にまとめられているが、本インタビューでは、この「正史」には記載されていない大学の実態について、生き生きと語られている。また、是永名誉教授が学長として取り組んだ法人化と大阪大学との統合への対応への証言は、歴史研究の貴重な素材となるだけでなく、今後の大学改革のための経営情報ともなるであろう。

なお、本インタビューの映像及び音声については、文書館設置準備室で保管している。映像・音声の利用を希望される方は、文書館設置準備室までご連絡いただきたい。

資料

2008年9月10日

於 大阪大学外国語学部長室
(大阪府箕面市)

大阪外国語大学で中国語を専攻した動機

進藤 それでは是永駿先生のインタビューを始めたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

現在の外国語学部生は、大阪外国語大学は箕面からスタートをしたと考えている学生も多いようですが、実際は上本町でスタートしています。いまは、その時代を実際には知らない教員もたくさんいるかとは思いますが、まずは、是永先生に上本町時代の大阪外国語大学生について語っていただきたいと思っております。

また、先生が大阪外国語大学に進学して、中国語を専攻されようと考えた動機などをお話しいただければと思います。

是永 私が大阪外大の中国語学科、そのころは学科がついて中国語学科と言っていたのですが、そこに入学したのは昭和37年ですから、1962年です。そのころは一期校、二期校に分かれていましたので、両方受けられました。私は一期校で京都大学の文学部を受けたのですが失敗して、二期校で大阪外大の中国語学科を受けて、現役で大阪外大に入りました。浪人をする気持ちはありませんでしたから。

いずれも中国文学というか、中国に対する興味があって志望校を選んだんです。振り返ってみますと、やはり高校時代の読書、皆さん、そうでしょうけれども、読書に影響を受けているわけで、一般的な文学への興味、それから中国への興味というものは、中学のときもありますけれども、主に高校3年間の読書体験にあると思います。たまたま父親の蔵書で、筑摩書房版の『現代日本文学全集』という100巻本の全集がありまして、それを高校生のころに読みふけていたということもあるのですけれども。

私は九州の大分県大分市の高校ですが、大分市というのは上野丘高校と大分舞鶴高校と2つあって、上野丘は進学校で歴史が古い。舞鶴高校は新しくつくったので、私が受けた頃は合同選抜で選択できない。毎年、成績順に上から振り分けていたので、今年が一番は上野丘、次の年の一番は舞鶴高校と、こうなんです。

私は9年目の舞鶴の卒業生で、父親も姉も上野丘だったので上野丘へ行きたかったんですが、たまたま舞鶴に振り分けられて舞鶴高校に入った。ときどき、花園でのラグビー大会にも出ていますが、舞鶴高校はラグビーが校技で、体格の有無を言わず、みんなラグビーをやらされた。私はモヤシのようにやせていたんですけど、全員、必須科目でラグビーをやっていたと(笑)。

しかし、そうやりながら進学校で鍛えに鍛える学校で、図書室も充実していて、小林秀雄の全集もあったので、家では『現代日本文学全集』を読み、高校では小林秀雄をかなり

読んでいた。

その当時は、いまと違って文庫は岩波文庫、新書は岩波新書の時代なんです。いまは講談社現代新書とか、学術文庫なんてすごくいいのがありますけど、そのころは岩波の時代で、たまたま魯迅という作家の散文詩集の『野草』、竹内好さん訳の薄い本ですけど、それを読んだり、岩波新書から同じく竹内好さんの訳で『魯迅評論集』が出ていたので、そういうものを読んでいた。

岩波現代叢書も出ていて、アメリカにアグネス・スモドレーという優れた女性ジャーナリストがいるんですが、その方が『偉大なる道』という本を書いていたんです。これは、毛沢東と一緒に中国革命を戦った朱徳という人の伝記なんですけど、すごく面白いと言いますか、神格化された毛沢東とは違って、本当に庶民と一緒に革命を戦った人の伝記。そういうものを読んで、一般的な文学への思いと中国への思いがかき立てられた。

魯迅が決定的でしたかね。魯迅の散文詩集と評論集を読んで、こんなに優れた作家がいるのかということ、京大に受かったら古典文学をやろう、外大に受かったら現代文学をやろうと思った。それで一方は失敗して、一方は受かったんで、大阪外大の中国語に入ったんです。

大学受験を失敗すると欠落感が残りますよね。やはり失敗ですから。それは、あとで触れますけれども、たまたま恩師の相浦杲先生が大阪外大を出て京都大学へ行かれて、吉川幸次郎先生につかれた。その方がずっと恩師だったということ。それから外大の教員として帰ってきて、私は非常に狭い分野、中国のモダンポエツリー (modern poetry)、現代詩を一時期やっていたんです。ほかの方はあまりやらないんでしょうけれども、その研究が認められて、京都大学の当時の文学部長、中国文学の大家である興膳宏先生に非常勤で来てくださると誘われて、2年間ぐらい京大文学部で講義をしたんです。そういうプロセスを踏んで、結局、若いころの欠落感は埋まった。

そういう経過で外大に入ったのですが、当時の印象は、とにかく建物が殺風景で、これが大学かというような建物なんです。(インタビューの部屋に飾ってある戦前の校舎を描いた絵を指し示して) あれは立派な絵ですが戦災を受ける前の絵で、あれから3階部分が戦災でなくなり、その本館というのは2階部分なんです。戦災を受けたそのままの状態が残っていますから、横に新しい建物ができたのですが、普通のイメージとして描く大学からはほど遠い建物でした。

しかし当時の外大生は、建物ではなくて中身なんだと。一期校、二期校と分かれているけれども、二期校、それがどうしたというんだ、ここが語学の殿堂なんだと。皆さん、語学の殿堂ここにありというようなプライドを持ってやっていたと思うんです。

ところが、それには、いわゆるメダルの表と裏があって、そういうプライドや自負というのは表、裏返すと鬱屈したもの、思いがある。それはエネルギーに変わるのですが、当時は大学院がありませんでしたから、外大で4年間が終わると、大学院は京大、阪大へ行くという学生がかなりいました。

僕らの同期でも、前後でも、特に言語学、哲学、経済学という面で、阪大は中国哲学が

盛んでしたから、中哲は阪大に行こうか、そして文学とか言語学は京大に行こうかという外大生がかなりいましたね。大阪外大というのは、それはそれで面白い存在だったと思うんですけど。

大阪外国語大学の歴史

是永 あと、外大の歴史というものを最初に話しておいたほうがいいと思います。1921年に創立されますね。あそこに写真があるんですが、林蝶子さんというご婦人。ご主人が林竹三郎さんでしたか、海運業で一大資産を成した方で、この方が日本国に当時100万円という寄付をする。いろいろな計算の仕方があって、時価20億円とか30億円とか言われるぐらいのものを、ほんとに寄附するんですね。そして、これで教育機関をつくってくださいと。

たまたま東京外国語学校がありましたから、大阪にも国際人を養成するための外国語学校をとということで、当時の文部大臣も賛成して、ほとんどの資金は林蝶子さんの資金でできたのではないのでしょうか。当時、そういう専門学校は、大阪外語だけではなくて、いくつかできたそうです。そういうかたちでできた。

また、これは知らない人が多いのですが、大阪外語は3年制です。東京外語は4年制だったと思いますが。だから陳舜臣も司馬遼太郎も3年制の大阪外語を出ている。そして、相浦先生も伊地智（善継）先生も3年制の大阪外語を出て、京都大学の文学部に進まれました。作家の庄野潤三さんなどは、大阪外語の英語を出て、九州大学の文学部に行くとか、当時、そういう方は非常に多かったですね。

その時代が、1921年から1949年の新制大学になるまでですから、28年間あります。1949年には新制大学が全国に一斉にできまして、4年制に変わり、それが2004年の法人化まで55年間続くわけです。そして法人化をして3年続きましたので、大阪外国語学校時代を含めると合わせて86年の歴史があるんですが、大学だけの歴史からすると58年ぐらいの歴史、60年を切るというかね。

しかし、普通はどこ大学でも、阪大も適塾と懐徳堂からあるという。懐徳堂は、ものすごく古いですよ。18世紀初めでしょう。そこから続いているとおっしゃるわけだし、東京外国語大学のパンフレットを見ても、百何十年の歴史があると書いてあるんです。どこから始まるんですかと聞くと、蕃書取調所か何かあったでしょう。そこから始まって、ずっと経過が書いてあるわけですから、それから言うと、うちは大阪外国語学校から始まっていると言っても何もおかしくない。86年の歴史なんです。

だから僕から見ると、次元を3度変えているんです。最初（の次元）は専門の語学学校でしょう。新制になって、それから法人化したでしょう。法人化は非常に短いんですけど、3度次元を変えている。4度目に旧帝大と一緒にするという一大次元の飛躍をしたというのが、うちの大学の歴史だと思うんです。

しかし、ほとんど知らない人は知らないですよ。大阪の海運業界で一大資産を成した方の国家に対する寄附で、官立の学校が大阪にできたという、その由来を、あまり知らない。

だから、いま顕彰碑が下にありますよね。なぜ、あの顕彰碑ができたかと言うと、阪大との統合が新聞やニュースに出て、ご子孫が訪ねて来られたんです。「うちの太婆あさん、林蝶子さんの寄付で、この大阪外語ができたということを、われわれは聞いておりました。いまの大学の様子を見せてください。林蝶子さんの顕彰碑か何かあるんでしょうね」と(笑)。

進藤 ああ、なるほど(笑)。

是永 その方は銅像か何かが建っていると思っておられたんですよね。どこにもないということで、同窓会に問い合わせせて、やっと顕彰版が出てきた。

顕彰版には説明が書いてあります。戦災を受けて、幸い焼け残っていたんです。その顕彰版をきちんとしたかたちで設置するというので、お孫さんにあたる方にご夫妻で来ていただいて除幕式をやりました。これが私立大学だったら、その方は理事長になっている方ですからね。そういうことを、きちんと知らない人が多いですね。

いずれにしろ、寄附は民間人ですが、官立の外国語学校でスタートした。戦前・戦中は8つぐらいしか専攻語というか、語学はなかったと思うのですが、マレー語が競争率が一番高かったとか、いろいろと聞きます。日本の戦時体制と言いますか、ずっとインドネシアあたりに軍部が侵出していましたから、そういう色彩の強い大学だったのではないかと思うのですが、戦争が終わって、そういうことは何もありませんから。

上本町から箕面への移転

是永 歴史は、だいたいそれぐらいでいいでしょうか。この箕面に移転してきたのは、たしか1979年でしょう。

進藤 はい。

是永 だから1921年から1979年まで、ほんの短いあいだ、高槻にも一部移動したことがあるんですが、ほとんどは上本町ですから、そこに57年、58年いたことになるんですかね。それから、こちらに替わったということになると思います。

私は1980年に大分大学から替わってきましたから、移転したばかりのころで、伊地智先生が学長をなさっておられたんですが、まだ、きちんとした学長室も整えられていませんでした。

雰囲気は、がらっと変わっていったというか、まず先生方が個人研究室を持っておられるということ。上本町にあったころは、名だたる先生方が3、4人一部屋ですよ。文学の研究室はここ、言語の研究室はここ、経済、歴史と分かれている。個人研究室ではなかったんですね。それだけ手狭な大学だったんでしょうけど、箕面では、皆さん個人研究室をお持ちで、上本町に比べると運動場もきちんとあって、広々としているという感じは受けましたね。建物も当時は新しかったですから、なかなか立派な大学になったなという感じでした。

ただ学生は、われわれのころは語科によって、フランス語などは女子学生がかなり多かったのですが、中国語などはほとんど男子校みたいなもので、50名の学生定員で女性は

2名から4、5名という、そんな感じのころでした。

特に中国語は、中国との国交が回復していませんでしたから。国交回復は1972年でしたか。私は1962年から1966年までで、大学院ができた1969年に帰ってきましたけど、まだ、そのころは回復していなかった。それまでは、バスに乗って「外大の学生さんですか。何語なの」と聞かれて「中国語です」と言うと、「大変ね」と同情された（笑）。

進藤 ははは（笑）。

是永 就職がない、将来図は何もないというふうな時代でしたから、そのころは同情されていました。

本当に大学は建物ではなくて中身だと思んですが、いわゆる快適空間には、ほど遠かったんで、ああいう空間では、いまの時代は通用しないでしょうね。ちょっと話が長くなりました。

進藤 いえいえ、とんでもございません。

専攻語の数が、いまより、ずっと少ないということだったのですが、中国語は1学年50名。

是永 募集人員は50名でしたね。それを2クラスに分けて、A、Bのクラスで。

今度、統合して中国語を40名に絞ったでしょう。もとの語科体制に戻って教育できるのではないかと思うんですけどね。

上本町時代の学生生活

進藤 いまは女子学生が大部分で、先生のころからは、ずいぶん雰囲気が変わったかと思うのですが、その当時の男性ばかりの中国語専攻では、友人関係とか、またずいぶん違っていたんでしょうか。このごろは授業が終わったら三々五々帰っていくという印象ですが、街中でもありますから、一緒に飲みに行ったりとか、ひよっとすると先生方とも距離が近いとか、そういう雰囲気はあったんでしょうか。

是永 どうか。僕は孤独な学生だったからね。マージャンもしなかったから、付き合いはあまりよくなかったですが、ちょっと喫茶店に出かけて先生と話をするとか、そういう空間は周りにいろいろとありましたね。

だいたい、大学のなかで言語を越えて付き合うというのが、あまりないもんね。いまもあまりないんですかね。私は絵画部のサークルで絵を描いたり、中国研究会で何か研究をやったり、映画関係のサークルにも入ったりして、いろいろなところに顔を出していたので、そういう付き合いは非常に面白かったですよ。

大阪外大というのは面白いところで、卒業生でも専門の画家になった人が何人もいらっしゃるんです。フランス語と中国語にもいらっしゃるね。そういう先生、そういう現職の画家が絵画部にやってきて、デッサンとかいろいろ教えてくれるんです。それは語科を越えて付き合いますし、「シナリオ」をひっくり返した「オリナシ会」という名前で映画鑑賞クラブをつくって、リーダーには「自分は映画監督になるんだ」という面白い男がいました。結局、映画監督にはならなかったけれども、助監督ぐらいにはなったのかな。

また、大阪外大の総合雑誌も出していました。昔は、大学の新聞も立派な新聞で学生がつくっていましたが、いまよりも男性中心で、社会思想的な動きをする方もかなりいらっしやっただけで熱気がありましたね。その熱気の底流には、先ほど言った鬱屈した精神があるから (笑)。

進藤 ああ、なるほど (笑)。

是永 それが力になって、いろいろな動きがあったと思うんですよ。いまと違って、何か熱気がありました。

そのなかの女性というのは、それこそ華ですから、ちやほやされるのですが、いまは女性が多すぎて、男性のほうが教室のなかで委縮しているのかもしれないですね。

進藤 そうですね。

女子学生の増加

進藤 先生は、学生、大学院生、それから教員として、ずっと長いあいだ大阪外大にかかわっておられますけれども、いつぐらいから、その雰囲気というんでしょうか。女子学生が増えだしたとか、そういう変化は。

是永 いろいろな人とその話題になるんですが、共通一次試験以後ではないかという説をよく聞きます。共通一次になって、一期校、二期校がなくなったんですよ。

進藤 はい。

是永 一期校、二期校を廃止したのがいつかは、もう忘れてしまいましたけれども (1979年)、あれがかなり影響しているんじゃないですかね。僕らのころは浪人生がほとんどで、京大、阪大に、ちょっと失敗したという方が多かったですよね。

そこから一期校、二期校制度が廃止されて、高校の受験指導も変わっていったのではないですか。非常に細かい輪切りをしていて、そこで、よく勉強をする女性。まあ、外国語というのは、どこも女性が多いですから、上智にしろ、東京外大にしろ外国語・文学部系では多いので、結局、世間並みに女性が増えたという感じなんじゃないかな。

それまでは、いわゆるもさ (猛者) 連中の男子学生がのさばっていると言うか、かなり活躍していると言うか、学生運動にしろ、研究活動にしろね。非常にエネルギーのある学生がリーダー格として何人かいらした。いまは、そういう学生がいなくなりましたね。

大学は成績順に入試判定をしますから、成績のいい女子学生が入ってくるのと、一時期、大阪外大が女性にとって一種のステイタスになった時期があったんです。いまはどうか知りませんよ。大阪外大を出た女子学生は、あまり就職に熱心でなくてもいいんです。永久就職が待っているから (笑)。

進藤 なるほど (笑)。

是永 そのステイタスとして外大が対象になるという面もあったらしいのですが、これはどうしようもないですね。

私が学長時代は、法人化をして、すぐに統合協議ですから非常に忙しかったのですが、時間がある限り、同窓会の有力支部である東京支部、大阪支部、京都支部、神戸支部、名

古屋支部とか、いろいろなところにあいさつに行きました。すると東京支部あたりは鼻息が荒くて、なぜ学生の男女比率をせめて5：5にしないのかと言うわけですね（笑）。

合否判定は受験番号もわからない。点数がずっと出るだけですと。最後は0.5か1点で決まるんですけど申しあげても、「私立は一部やっとなぞ」とかね（笑）。

進藤 ははは（笑）。

是永 そういう話。

それは彼らにも理由があるんですよ。ほとんど男子校時代の、大阪外国語学校時代の卒業生、それから新制の初期のころの卒業生が、会社の取締役とか重役にどんどんなっているでしょう。

進藤 ええ。

是永 女性では、なかなかそこまで上がるのは大変なんですよ。そういう商社とか、銀行とか、企業とかで活躍をなさっている方は、非常に優秀な方が多くて、その方々は、もっと男性を入学させて鍛えろという思いが強かったんですよ。

進藤 ああ。

是永 現実には難しいですね。でも、これからは女性のほうが強くなるんでしょうから、それはそれでいいとは思いますが（笑）。

大阪外国語大学に赴任

進藤 そうしましたら、次の話題に移りたいと思います。先生は鹿児島経済大学、大分大学を経て、1980年に大阪外国語大学に赴任されましたが、また母校に戻って来られた経緯等、思い出に残っておられることがありましたら。

是永 教員人事というものは、どなたの場合もそうでしょうけど、いつ、どういう人事になるかは、全然、検討もつかないので。

私は学部を出たのが1966年ですよ。おやじが新聞記者だったものですから、新聞社を2、3社受けて、毎日新聞社は面接まで行ったんですが、面接ではねられました。それで就職に失敗して、それでも生活はしなければいけないので、当時は中国との国交回復前で日中貿易はみなどこも中小の商社がやっていたので、そこに入ったと。しかし、そこはうまく行かなくて、出版社に入り直したりして、2年半ぐらい東京で生活していたんです。

そして1969年に大学院ができましたから、相浦先生の下で研究をしようと思って帰ってきたんです。2年間で大学院修士が終わって、終わった年に、たまたま鹿児島の口があった。そのころの大阪外大の中国語学科というのは、修士課程を出た段階で、だいたいマーケットがいくつかあったんですね。いまとは全然違います。それで幸い、私立ですが鹿児島に就職できた。

そして、大分大学も大阪外大のマーケットの一つだったので、その先生が移動なさって、私がそこに移ったと。大分大学は3、4年ですから短かったですね。そうしたら、大阪外大の本体の人事が動いて、「応募しないか」というお誘いがあったものですから応募したんです。自分からどうなるものではないから、そういう偶然が重なって、母校に帰ってき

たということになると思うんですけど。

進藤 やはり母校に教員として帰ってくるというのは、また格別な気持ちというのでしょうか。そういうものがあるのかなと思ったりもするんですが。

是永 そうですよ。私にとっては第二のふるさとみたいなもので、学生、大学院の生活をずっと大阪でやりましたし、やはり自分の研究姿勢、中国語、中国文学というのを、そこで教えていただいた。そこで今度は自分が教えるということで、身の引き締まる思いはしましたけどね。

進藤 そして母校に復帰なされたときには、先ほどからお話にも出ておりますように、キャンパスも変わっていたこともあります。それまでは学生、大学院生として大学を見ておられたので、今度は教員として大学を見られるようになって、やはり印象とか、学生に対する考えとか、そういうもので変わった点などございますか。

是永 学生像というのは、僕は時代によって変わるものではないかと思うんですが、あまり変わらないというか、あまり大きく変わった印象は受けません。男女の比率以外は。

でも大学教員に対するイメージは、私のなかで、ちょっと断絶があるんですよ。と言うのは、私が学生時代に習った先生方のイメージが非常に大きい。威厳があって、存在として大きくて、その先生がそこにいらっしやるだけで、その先生が持っている学風なり、そういうものがにじみ出ると。中国語学科にも、そういう先生が何人もいらした。それが僕自身もそうなんですけど、だんだんと小粒になって、中身が薄められてきているなという感じが非常にするんです。

例えば、私の恩師は相浦先生ですけど、相浦先生は大阪外大から京都大学へ行かれて、吉川幸次郎先生の薫陶を受けた方で、実に見事な中国語を話される。中国留学経験は何もないんですよ。倉石武四郎先生に音韻を習い、吉川幸次郎先生に中国文学をたたき込まれ、ご自分は語学の天才。司馬遼太郎さんは「相浦さん、あなた、語学の天才だね」と言っていたから、才能をお持ちの先生なんです。

言葉というのは、聞けば、すぐに実力がわかる世界ですよ。東京大学で北京大学の先生の講演があったときも、その歓迎パーティーでは、相浦先生が関西代表として見事な中国語であいさつをなさった。それだけの実力の持ち主だったんです。その方の文学の講義。私は中国語は伊地智先生に1、2年と習いました。相浦先生のあの文学の講義というのは、実によく調べているなと伝わってくるような講義をなさるんですよ。

そして、その上に金子二郎先生がおられて、学長になられた方ですけども、魯迅の研究をなさっていたんです。私は3年になって、その魯迅ゼミに入れて、高校時代に読んで魯迅が原書で読めるなど。2年のときに、中国語の学生は、みんな『阿Q正伝』を読むんですけどね。それでゼミは魯迅ゼミで、研究できるなと思ったら、しばらくして学長になられて、どういうふうに行ったかという、「私は学長になったので、君たち、好きなどころへ行きたまえ」と言うわけね(笑)。

進藤 ははは(笑)。

是永 こういう発言をする世界というのは面白いじゃないですか。「君たち、好きなどころへ行きたまえ」と、突き放すようなことを言うわけですよ。それで相浦ゼミに移籍したんですけどね。

もっとすごいのは伊地智先生ですよ。ここで中国語・中国現代文学をやるうと入ったでしょう。担任の伊地智先生が最初の授業のときに何をおっしゃったかと言うと、「中国語という言葉は、トーンランゲージ（声調言語）と言われるぐらい、ランゲージとしては発音が重要な言語なんだ。私は君たちの口むろ、口腔の筋肉を半年で中国人に変えてみせる」と豪語なさるわけです。

進藤 ほう。

是永 最初の時間に豪語なさる。また最初の頃に「君たちは、まず服部四郎の『音声学』を読みたまえ。岩波から出ている」。そういう口調で学生に言うんですよ。それは、じんと伝わってきますよ。

そういった教師像というのが、だんだんなくなってくるんです。学生との距離の取り方も変わってくると思うんですけど。だから、伊地智先生、金子先生、相浦先生のイメージというのは非常に強烈なものがあって、存在として偉大だなと思うんです。

そして外国人教師では、お一人、清朝を建国した満州族、満族出身の方がいらっしゃった。その先生は金毓本と言われる方で、苗字が金ですけど「私の本名は愛新覚羅だ」と言う。愛新覚羅の皇室の系統の人なんです。

その方は、日本語に対してまったく興味を示さない、話さない。軽蔑しているとか、そんなのではないんです。興味を示さないという態度、それがすごいんですよ。教壇に座るでしょう。最初から中国語で、ばんとやるわけです。しかし、一人一人の発音は徹底的に訓練してくれるんですよ。そういう教師像というのが、ほぼ、なくなったなという感じですよ。

僕らと次の世代の中国語の先生方は、もう歳が空いているから。杉村博文さんは、それに近い存在かな。かなり強い、強烈な指導をなさるといふ噂は聞いているから（笑）。

進藤 ははは（笑）。

是永 そういう伝統は残したほうがいいと思うんですけど、女子学生が多くなると、なかなかそういう接し方もできないでしょう。

進藤 そうですね。

是永 金子二郎先生なんて、すごいですよ。2年生の魯迅の講読のときに、数少ない女子学生の一人が予習をサボってしてこなかったんですかね。当てるでしょう。訳せない。「立っとれ」と。女子学生は1時間立ったままですよ。僕らも、これは今日は機嫌が悪いなと思いつながら授業を受けるでしょう。そして終わると、先生は、ばあっと教室から出て行く。女子学生は座ってさめざめと泣くわけですよ。

進藤 ああ、なるほど。

是永 そういう風景というのは、いまはないですよ。

進藤 ないですね。

是永 しかし、そういう風景というのは、いまから思うと非常に貴重で、それだけ大学の教師像というのは、そこに座っている、あるいは教壇に立っているだけで、何かが伝わってくるというふうにあるべきだなと感じています。そのギャップというのが、だんだんと広がってきているのかなというのは思いますね。どのように教師像を自分でつくりあげていくのかというのは難しいところですけどね。

進藤 いまのお話をうかがっていると、そういう教師像の変遷と、大阪外大のキャンパスの移転が重なったというか。

是永 ああ、そうかもしれませんね。そうですね。

進藤 やはり是永先生は、ご自分の経験が上本町で、その先生方のイメージがありますので。

是永 ありますよね。

進藤 こちらに来たら、すべて変わっているというような印象を受けたのですけれども。

是永 でも、べつに学力が落ちたとか、そういうイメージはありませんから。やはり優れた学生は優れていて、いい論文も書くし。だから学生像の変化というのは、あまり感じないですね。男女の比率を除いてはね。教師は、もう少し何かを模索すべきではないかなという気がしているんです。

在職中の教育・研究について

進藤 はい、ありがとうございます。いま、ちょうど大学の教師像というか、先生方の姿が出てまいりましたので、それにも若干、関係するかと思いますけれども、是永先生の在職中の研究・教育について、印象深いことなどを教えていただけたらと思うのですが。

是永 そうですね。私は、高校時代からの興味を引き継いで、中国文学、現代文学で大阪外大に来ましたからね。当時は現代文学のメッカでしたから。東京都立大、大阪外国語大学、東京大学も少しやっていましたけれども、京都大学は古典ですからね。相浦先生を中心に関西の研究も盛り上がっていましたので。

最初は魯迅研究ということを中心に心がけていたのですが、魯迅ゼミは空中分解しましたし、自分で何かテーマを探さないといけないということで、もう一人の茅盾という作家、当時は魯迅、茅盾と並び称せられていた著名な作家ですが、その作家を研究してみようかなと。

当時、日本の現代文学研究の中国文学は、魯迅一色でしたから、ほかの人があまりやっていないことをやろうかなということで、しばらくやっていたのですが、最近20年あまりは、もう現代詩、ポエツリーのほうに足を伸ばしているというか、現代詩と茅盾研究という2本柱でやっているのですが、いまは現代詩のほうに比重がかかっていますね。

魯迅や茅盾は現代小説ですよ。それで『魯迅全集』が日本で20巻出たときには、ほんの少し訳者に参加したこともありますけれども、小説では茅盾の研究をやって、詩では現代詩、同時代詩の研究をしています。

同時代詩でも、いわゆる文化大革命中から文化大革命後に、彗星のように登場した詩人のグループがあるのですが、そういったグループをずっと研究していて、いろいろと翻訳

もしてきました。その1冊の翻訳書が認められて、歷程という詩の結社があるのですが、その歷程賞をいただきましたので、日本の社会で認められたのかなと。歷程賞というのは島崎藤村を記念した賞ですから、名誉として受け止めようと感じてはいますが。

だから、小説と詩の両方をやっているのですが、私にとって文学とは何か、ひとことで言いなさいと言われた場合、結局、言語による人間のイマジネーション、想像力の記号化なんですよ。言語を使って、人間の想像力のはたらいたもの、はたらきを記号化する。まあ、味も素っ気もない言い方ですが、それが文学であって、そうすると言語というのが非常に重要になるわけです。詩的言語、小説言語が古典から現代へ、どのようにコード化、規範化しているのか、しないのかとか。その複眼的な視点が、僕は中国文学の場合は必要だと思うんです。非常に文学の歴史は長いからです。

ですから現代作家のなかでも、18世紀に『紅樓夢』の作者の曹雪芹という人がいましたが、20世紀の曹雪芹たらしとする人がいたり、現代詩人でも、中国の場合は世界文学のなかで古典詩が光り輝いていますから、その重圧のなかで、どうやって現代詩を切り開くかということをやっている人もいます。そういった古典と現代を複眼的に見て、規範化されてないもの、されているもの。

古典詩の定型なんて、非常に美しいですよ。それが非定型になっても、どこかへつながつているのかとか、中国古典詩は押韻しますから、それはどうなっているのかとか、そういったところに興味があった。それはそれなりに研究してきて、日本の詩壇でも、一部、認められましたから、やってきたかいたかと思えますけれども。

それは学生、次の世代に研究者が何人か出てきているのですが、なかなか現代文学、古典文学をやっていたら、どう言ったらいいのかな。先ほどのマーケットの問題ではないですが、ここは博士課程が平成9（1997）年に大学院改組でできましたが、やはりオーバードクターが多いのではないですか。文系はどこもそうでしょうけれども、なかなか就職口がない。

私は修士第一号で、1969年に大学院ができたときに社会から戻ってきて、幸い鹿児島の私立ですが大学教員になれたと。それとは状況がまったく違って、国交が回復するでしょう。留学生が来るでしょう。いまは大量に来ていますよね。留学生10万人計画のうちの6、7万人は中国人です。いろいろな方が来ますけれども、日本で学位を取って、中国へ戻る人と戻らない人がいる。そういう人たちが、1人の公募でも大量に応募するんです。

例えば、愛知大学や同志社大学が中国語教員を1名募集したとすると、100名以上集まるそうです。半数は中国人ですよ。彼らはネイティブで、論文も必死に書きますから、論文数で負け、ネイティブで負ける。大学からしてみれば、発音は日本人を鍛えるよりもネイティブを採ったほうがいい、研究論文でも数で負けるということで、いまはなかなか難しいですね。

進藤 ああ、そうなんですか。

是永 古典をなさっている方は、まだマーケットがいろいろとあると思うんですが、たぶん文学自体のマーケットが狭い。だから、なかなか研究を継続していく若い研究者が出て

こないと言うか、特にポエツリーの場合は、詩の場合は、もともと興味のある人となない人で分かれるでしょう。詩に興味を持つというのは、なかなか大変ですから。

でも、大阪外大は阪大と統合して言語文化研究科になって、どうなのでしょうね。受験生というのは、たくさん来ているのでしょうか。そうでもないですか。広がりが出ていますかね。

進藤 広がりが出ているのではないかと思います。

是永 それだったらいいですね。

進藤 はい。国際化と言うか、グローバルゼーションの一環として、その中国人留学生の話は、私はいま初めてうかがいました。公募に半分も中国の方が来られるというのもびっくりしたのですが、それによってプラス面と言うのでしょうか。日本人の大学院生も、もっと自分たちも頑張らなければいけないという、そういうプラス効果も。

是永 そうそう。それもありますし、研究方法にしろ、研究の視点にしろ、本当に独自のものを開拓しないと太刀打ちできないと言うか、そういうものがありますから。

図書館長として

進藤 そうしましたら、その続きからで、今度は大阪外国語大学の運営における、さまざまなお経験などをお話いただきたいと思います。

まず、先生は2000年から2003年まで、図書館長など要職をお務めですが、学長就任以前に大学運営について印象深い出来事などがありましたら、お話いただけたらと思います。

是永 とにかく学長時代が過激な時代だったから、あとは薄められてしまって、図書館長時代はのんびりしていたなというイメージしかないんですね。図書館長は2期で、2期目に入って学長選がありましたから。

図書館長のころは、ここには60万冊ぐらゐの図書があって、その6割強が外国書籍です。30数万冊、非常に貴重な外国書があり、石濱文庫という、もともと東洋学関係のすごい蔵書もありますから。例えば満州語の研究などをやるんだったら、宝ものがいっぱいあるんですね。モンゴル語の資料も多いですし、研究者がいないことはないのですが、学内よりは外から閲覧に来る人が多くて、もったいないなという思いがありました。

阪大も300万冊ぐらゐありますから、新しい阪大の図書館の蔵書数は400万冊ちょっと切るくらいで、かなり有力な図書蔵書数になりますね。一時期、東大で800万冊とか言われていましたから。国会図書館で1千何百万冊でしょう。だから全体に統合して、図書の利用については非常にいい蔵書を持っていますから、利用者の便宜を図ったらいと思うんです。

そして、大学のなかに、こんな宝ものがあるんですから、満州語の研究者など、本当に育てたらいと思うのですけど。ほぼ滅びつつある言語だから興味がわかないかもしれませんが、何百年と続いた清朝を打ち立てた満州族でしょう。あるいはモンゴル語の研究も、ここはすごい人がたくさんいらっしゃいます。私は西洋書の文献は詳しくないですが、中国語もかなり文献がありますから、図書館長時代は、貴重な図書をどうやって保存をす

るか、あるいは整理するかということに明け暮れていましたね。

あと、いろいろな委員会はありましたが、それは誰でもやることですから。

進藤 私も全然分野違いの方に「図書館を案内してほしい」と言われて案内したこともあるのですが、その貴重な蔵書というのは、戦災も逃れて、旧上本町時代から引き継がれているものですよ。

是永 そうです。戦災を逃れたものもあるし、石濱文庫は寄贈図書ですね。新制大学になってから石濱家より寄贈されたので、これは戦災には遭っていません。あとは、先生方が新聞・雑誌を含め取り揃えてきた、そういう歴史があつてのことですけど。

進藤 先ほど、外大の歴史自体を知らない学生も多いという話がありましたが、その外大の宝を知らない学生も、おそらくいるでしょうね。

是永 そうですね。

進藤 学生時代に、そういうものがあることを少しでも知る機会があれば、また研究者の卵と言うんでしょうか、そういうものが育っていく可能性もあるのではないかなと思います。

大阪大学との統合

是永 あとで統合の話になると思いますが、結局、統合で第4度目の一次元を変えたわけでしょう。

阪大はひとこと言えば、重点化された研究型大学院大学なんです。1千億円規模の国家予算を使っているし、巨大な研究組織ですよ。東大は2千数百億円で飛びぬけていますが、あと6つの旧帝大は1千億円規模で動いているでしょう。うちは50億円を切っているような大学ですから。

それだけの研究組織のなかの世界言語研究センター、外国語学部は、言語研究、対象文化圏研究を高品質化して、少数精鋭化して研究者を育てるという方向を、僕は追及すべきだと思うんです。

日本での外国語教育というのは、いろいろなかたちでされています。インターネットでもいろいろなかたちでされていますし、利用しようと思えば、いろいろなことができる。

しかし、こういう高等教育機関のなかで、せっかく旧帝大に外国語学部と世界言語研究センターをつくったわけですから、東大にもないようなものをつくったわけですから、そこでは、社会に優秀な人を送り出すのも大切ですが、研究者も社会の一部ですから、日本の言語研究、対象文化圏研究のトップクラスをここでつくるのだと、送り出すのだという少数精鋭化すればいいと思うんですよ。それができる環境に、われわれは次元を飛躍したんです。

統合では、外大はそのまま単独で玉砕しろという意見もありました。玉砕をそのままやったらいいではないかと。しかし、玉砕が目に見えていてやるのも意味がないし、われわれが高い理想を掲げていても、理想を実現することが見えないと言うか、衰退の方向は人的・財政的に見えるけれども、理想を実現するために、いかにほかの学問と融合をするか、

いかに少数精鋭で高度化するかという場合に、単体ではなかなかできないと。

それが、こういう総合大学という枠のなかに組み込まれてやれば、やり方によってはできると思うんです。大阪大学という、その名前だけで受験生は来るでしょう。いまの時代は、そう思うんですよ。京都大学という名前前で受験生は来る。それで受験者層も変わってくるでしょうし、同窓会の言い方を借りれば、男子学生も増えるかもしれない。そして優秀な学生を選び抜いて鍛えれば、私は少数精鋭でいい学生を育てることができると思うんですけどね。そういう体制に移行したのだと、意識を切り替えられたらいいと思うんです。

菅 世界言語研究センターということで、学部や研究科ではなくてセンターということで、先生方はより柔軟性を持った研究ができるのではないかなどという気もするのですが、その点はいかがでしょうか。

是永 それが、その統合協議のなかでも、大阪外大の学内的に意見が割れると言うか、なかなか意見の一致をみないと言うか、将来像が見えなかった部分です。

うちは単科大学としては所帯が大きかったので、阪大の各部局に全員を振り分けるわけにはいかない。部局も、阪大のなかでいろいろと力関係があって、基準数があって、そうすると少数言語などはなかなか行き先が見つからない。マイナー、メジャーはあまり使ってはいけませんが、所帯の小さい言語はね。

それで、その方々を中心に、貴重な言語だから世界言語研究センターにまとめて入っていただく。そして「世界言語」と謳う限りは全言語を含めるべきだということで、所帯の大きいところからも入っていただくという組み立てになったんです。センターは、いわゆる既製の大学院よりも柔軟性があるという宮原（秀夫）総長の説明があり、統合協議でもそういう話が出た。阪大にも、いろいろなセンターがありますと。

それは、見方によっては、彼らもいい研究をしているんですよというかたちで意識が変わればいいのですが、いかんせん、何も経験していない外大では、大学院とセンターでは違うのではないかと、やはり二等国民ではないかという心配が、ずっとあったんです。それは実際に阪大のなかに入って、いろいろなセンターもあるわけだから、同じようなかたちで自分たちの研究を深めていけば払拭できると思うんです。

でも、なかなかすぐにはできないと。あれは当面、5年なり10年なりの計画を立ててやっているんでしょうけど。だから、例えば北京大学に計算機研究センターがあるんですが、そこは北京大学の組織のなかでも、そのほうが上なんです。そういうかたちで、阪大全体にもいろいろな言語の先生がいらっしやると思うので、そういう方々もテーマによっては入れながら、本当に柔軟な研究ができるためにセンターはあると思うんですけどね。そこで固まってしまったら意味がないと思います。

学長としての大学運営

進藤 ちょっとお話が前後して、学長時代のお話も少し入ってきましたが、2003年より大阪外国語大学長に就任されまして、教育研究発展のために、それから大学運営のためにご尽力されていますけれども、在職中、特に印象に残っている出来事など、いろいろとお

話いただけたらと思います。

是永 結局、2つあって、1つは国立大学法人化、もう1つは大阪大学との統合。これに尽きると思います。

法人化が2004年4月ですから、その1年ちょっと前に私は学長になりまして、その当時、国立大学が90何校ありましたが、大学の大小を問わず、全大学を法人化せよということで、阪大、京大、東大であろうが、大阪外大であろうが、同じように法人組織をつくるんです。その作業を松田（武）副学長、南田（みどり）副学長という副学長2人と乗り切って、法人化した。このお二人は、法人化後も、ずっと副学長としてご協力いただきました。

法人化というのは、やっていくにつれて中身がわかってくるもので、結局、大学の経営・運営の責任を文科省から大学に移せばよい、あなた方が大学の経営と運営を責任持ってやりなさい、そして中期目標・計画を文科省に提出しなさいと。ですから、一つは運営責任制をしいて、目標・計画を策定する。そして、その実績について評価制度をしいたわけです。また、大学運営には民間の経営手法を取り入れて、経営協議会を設ける。こういう体制で臨んでくださいというかたちに、全大学が切り替わりました。

しかし、かたちとしては切り替わっても、みんなは国立大学の教員の意識で、意識は切り替わりません。人間のメンタリティーほど切り替わるのが難しいものはないわけです。革命なんて政治革命や軍事革命でできるのですが、心的習性というのは変えられない。国立大学の教員だという意識は、なかなか変えられないですね。

そのへんの教授会とのギャップと言うか、人事権は役員会に移りましたが、人事権が役員会に移ったという意識が、まず教授会にない。ですから法人化して、人事案策定は、すべて役員会でやりました。そこで、日本語を除いて24言語は3人体制を死守すると。

そして外国人招聘教員を全専攻語に付けると。トルコ、ハンガリーはないので、とにかくやると。それはやってきたんです。これはやりきれてよかったです。阪大と統合する前ですが、どうしても付けたいということで、最後は阪大の承認を取り付けてやりましたからね。

そういうふうには、経営・運営の全権限は役員会に移りましたし、その権限は学長一人に集約、集中しています。しかし、そういう制度変更がかたちとしてわかっている、意識としてはまったくわからないところがあって、教授会とのあいだのずれが、かなりずっとありましたね。

統合協議は2年ぐらい、双方から協議会のメンバーを5人ずつ出して、これは総長・学長は出なかったのですが、侃々諤々30回前後やって、統合推進の合意ができるのが統合の1年前です。

菅 統合協議が始まったのが、2004年の5月です。

是永 もう5月に始まっていますか。

菅 はい。

是永 法人化して、すぐに始まっているんだな。それで2年ぐらいやって、2006年の3月に統合推進合意ができたと思うんです。そして統合計画書を大学設置委員会に出さなけ

ればいけないので、それをつくるのに協議会から統合推進協議会に組み替えて、ほぼ2週間に1回ぐらい、ずっと協議を続けたんです。

ひとことでは、統合というのは2つの大学、特に大阪外大にとっては変革と再生。物事を変えて再び生まれ変わるといふ、その物語ですから、まだ続いているんです。終わった物語ではなくて、現在進行中の物語。世界言語研究センターをつくりました、外国語学部はそのまま残します、大学院は言語文化研究科の言語社会専攻ですと言っても、阪大は各学部の上に、ずっと大学院があるんです。ですから理想としては、外国語学部の上に言語文化何々研究科と、ずっと乗るように移行しなければ、かたちとしては整わない。

かたちが整わなくても、実質やればいんです。実質、そういうかたちで、ずっと浸透していかなければいけないと思うんですよね。そうしないと、せっかく制度設計できたのに、それがなかなかうまく機能しないことになりますから、物語は進行中だということになると思うんですけどね。

先ほど、次元が4度変わって、4度目が統合だと言ったけれども、大阪外大にとっては一大次元の飛躍なんです。学生数は5千名弱ですから多いのですが、日本国の国家的な大学教育機関の俯瞰図から見ると、取るに足りない。言葉は悪いけれども、本当に弱小の大学なんですよ。

それが、研究型の重点化された大学院大学と統合したわけです。これは外国語学校時代、新制大学時代と違って、われわれはレベルの違う飛躍に挑戦したんだ、その統合を実現したんだという意識を、もう少し持っていたいと思う。また、そういう意識を持って、まだ挑戦中なんだということで、いろいろなことをしたほうがいいと思うんですけどね。

ですから、この物語は語る人によって風景がまったく違います。例えば、日本語日本文化教育センター、昔の留学生センターには20名ぐらいいますけれども、その方々を除いて、約160名の皆さんにとっては、自分の命運を決める各部局への移籍。世界言語研究センター、言文を含めて阪大の既存の部局への移動。一人一人の運命がかかっているんですよ。言葉は適切かどうかかわからないけど、外大にとっては民族大移動。そして一人一人の移籍、所在の位置が最後に固まり、初めてかたちが整った。それは最後まで大変な作業でした。でも皆さん、それぞれ160名前後の人たちは、皆さんきちんと。なかには、思いどおりにならなかったこともありますから、その人にとっての統合の風景は、まったく違う風景に見えると思うんです。いろいろな方、いろいろなケースがあります。それで最後の最後まで、つるし上げにあったこともありますけれども、何とか落ちついた。それは先生方の運命というか、所在が決まったわけなので、それはそれでよかったと思うんです。

同窓会に行くでしょう。それは製薬会社にしろ、再編、統合と、銀行でもたくさん統合を経験していますよ。まず聞かれるのが、「リストラは何名するんですか」と。「統合するそうですね。どれぐらいリストラするんですか」と、ほんと聞くわけですよ。「いや、一人としてリストラはされません。辞めるのは私一人です」と(笑)。

進藤 ははは(笑)。

是永 彼らは全然理解しない。民間と国立大学でそれだけ違うんですよ。事務もリストラ

はなかったのではないですか。配置換えは、いろいろとあったと思いますが。

進藤 そうですね、ないと思います。

是永 それだけ大学というところは、日本社会全体から見ると優遇されていますよ。特に国立大学は優遇されていると思います。

それで、これは個人的なことですけど、僕自身にはどういうふうに通合の風景が見えていたかと言うと、この根幹は日本国家の方針なんです。国立大学を整理、縮小、統合するというのは、遠山大臣のプランで国家の方針なんです。まず、これがありきなんです。そのあと、すぐに法人化が出てきました。

それで、先ほども俯瞰図を言いましたけれども、こういう都市型の文系単科というのは、文科省は本当に統合の対象として考えていた。文系だけではなく、ある日、文科省の役人が来て、「九州工大（九州工業大学）の意味はどこにあるんでしょうね」と、ぼつんと言うわけです。「九州大学に工学部ありますよね」なんて言うわけですよ（笑）。

進藤 ははは（笑）。

是永 そういう意識ですよ。

うちは、よく東京外大と比較されるんですが、先ほど言ったように、東京外大は蕃書取調所から始まっていて、うちは東大より古いんだというプライドを持っており、独立研究機関のAA研究所（アジア・アフリカ言語文化研究所）を持っていて、人的リソースがまったく違う。COEでしたか。あの予算をどんどん取るんですよ。うちは1回も取れずに終わりました。現代GPを1本か2本取ったぐらいで情けなかったんですが。向こうは外国語学校時代から4年制だということもあるんでしょうけど、名前は共通していても、中身が少し違っているということもあるんですね。

だから、大阪外大のわれわれ現職の教員は、皆さんはそこまで考えていたかどうかかわからないですが、私自身は、国家がそういう方針で、弱小単科大を整理・統合して差異化する、差別化しようとするのなら、自ら差異化して次元を変えてやろうと。国がそう思うのなら、自ら差別化、差異化して、自分から次元を変えたらいいのではないかと思ったんですよ。

もう自ら次元を変えるしかないということで、あとは闘いです。24専攻語で非常勤、外国人招聘教員をいかに組み込み、教育体制をいかに保証するかということで、紙切れ1枚でしたけど、総長との約束事を何とかとりつけて。

停年（外大は65歳、阪大は63歳）だけは最後までもめましたけど、いまのところは変わってないでしょう。

進藤 はい。

是永 あれは最後までもめましたけど、何とかこぎつけたんです。

これは、阪大側も総長が宮原さんになったことが大きな原因にあると思います。宮原さんとのあいだでは、とにかく、いろいろな問題がいつも噴出していましたが、最後は統合をやるんじゃないかという宮原さんとの信義というか、信頼というか、それが僕自身のなかにはあって、やり遂げようということで。

学内でも、いろいろとあったでしょう。あらゆることがありました。私たちを支援する人々のあいだでも意見が割れたりして、いろいろとありましたが、何とかそれを乗り切った。先ほど言ったように、物語は進行中で、これだけ教職員の方々が苦勞をなされたわけだから、私としてはいい方向へ展開してほしいんです。そう思います。

大阪大学外国語学部学生へのメッセージ

進藤 ありがとうございます。

では、大学をめぐる動向や今後のあり方についてということですが、先生のいままでのお話から、それに関するようなことも、かなりうかがうことができましたので、最後は大阪大学の外国語学部の学生に対して、何かメッセージをいただければと思います。

是永 そうですね。進藤先生から、その最後のテーマをいただいて、2つ言い伝えたいことがあるんです。

1つ目は、やはり大阪外大の時代から、いわば言葉の大学ですよ。そして僕自身は、言葉というか、言語こそ文化・文明の根幹だと思っているんです。うちの教授会でも、よく手段にすぎないとか、いろいろな意見がありましたけど、見方によってはそういう面もありますけど、人間の思考というか、感情を導き出すというか、その基盤にあるのは言語ですから、文化・文明の根幹は言語であると。

その言語を習得して、何を学ぶにしろ、対象文化圏の奥深く分け入って行って、相手と本当に心が通う対話ができないといけない。そのための言語というのは、手段のための言語のレベルを超えているんです。それこそ鍛えに鍛えないと、そこまで行けないですよ。特に中国語なんかは、4千年、5千年の歴史を誇っている国ですから、本当は古文にも通じ、現代文にも通じないと対話はできないわけです。

ですから学生の皆さんには、一つに、言語の習得にはそれなりの覚悟がいるということ、そういう思いで励んでいただきたいと。覚悟がいるなんて言うと、高飛車で受け入れてくれない学生も多いかと思うのですが、それを通り越せば、それを突き抜ければ、思いもよらない広い世界が広がってくるわけですよ。ですから、大阪外大の伝統を引き継ぐ阪大外国語学部での言語学習というのは、それなりの覚悟を持って取り組んでほしい、自分を鍛えてほしいということですね。

2つ目に、これはどの学生にも言えるのでしょけれど、これだけ情報があふれていますから、その情報を認識して判断する力は自分で鍛えるしかないんです。自分のなかに自分の方法、内蔵された装置というか、デバイスを持たないと振り回されるだけです。そのためには学生時代に読書も大切ですが、瞑想の時間を設けてほしいと。

あまり伝わらない言葉かもしれないけど、「沈黙黙考」という言葉があるでしょう。静かに考えて、来し方行く末を考えるとという沈黙黙考。ですから、瞑想の時間を設けて、1日のうちに、できたら1週間のうちに、何日かのうちに1回とか、じっくりと自分の考えを突き詰めて考えてみる。いま、そういう時間はほとんどありませんが、そこから自分なりの考えが生まれてくると。

例えば中国というのは、新中国成立後、動乱の続きですから、オリンピックは表面的に成功したようには見えますけど、どこでどういう事件が持ち上がるかわかりません。また文化大革命みたいな混乱も、内乱状態も発生するかもわかりませんが、そういうことも中国の歴史全体のなかで考えようとすると、よほど読書をしなければいけないし、自分で考えないといけない。

ですから、自分という存在があって、対象文化圏の中国語、中国文化圏がある。それを対比させて、自分で認識して判断をしていくということですね。

例えば、1989年に「六四」天安門事件がありました。あなたは、あれをどういうふうに見ますか、認識しますかと問われるわけですが、そのときに、あれは学生・市民たちの本当に基本的な民主化要求を、軍事力を使って弾圧したのだと言えるかどうかですよ。それは「新聞にそう書いてありました」ではなくて、自分の言葉として言えるかどうか。

そして、それを言うということは、いまの体制で入国するときに、それなりに覚悟があります。私は、1989年から2年ぐらいたと北京の知人を訪ねて行ったのですが、出国するときには、中国の空港で公安要員にパスポートを取り上げられましたからね。出国して、もう税関を通っているのに。

それを、西村成雄先生という同僚の偉い先生に話したんです。いまは人間科学部にいらっしやるのかな。

進藤 もう退職なされて、いまは放送大学ではないかと思います。

是永 そうですか。

そのことを西村さんに話すと、「それは是永さん、初歩的な警告だよ」と。あなたの北京市内での行動は、24時間、全部監視していたという意味だと言うんです。私は、そういう見解を持って、そういうことを本にも書きましたから、私と同じようなことがあり得るということになる。

ですから、そういう自分の発言に責任を持ち、それを認識して判断するということは、自分のなかにそういう装置がないとできない、そのデバイスを自分のなかにつくらないといけないんですね。それには、やはり学生時代に、その芽を自分で育てていくことが必要ではないかと思うんです。

いま、旧七帝大という言葉が、どこまで通用するかは知りませんが、研究型の重点化された本当のいい総合大学の一員になったわけですから、そこで学んでいるわけですから、学生も教員も日本国家の宝物みたいなものですよ。せっかく優れた環境にいるのだから、それを充分に利用して自分自身の才能を開かせてほしいと思いますね。

進藤 今日は貴重なお話をうかがうことができて、とても有意義だったと思います。どうもありがとうございました。

是永駿名誉教授略歴

福岡県に生まれる

1966年3月 大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒業

1966年4月 貿易会社及び出版社勤務（1968年6月まで）

- 1969年4月 大阪外国語大学大学院外国語学研究科中国語学専攻修士課程入学
1971年3月 大阪外国語大学大学院外国語学研究科中国語学専攻修士課程修了
(創設された大阪外国語大学大学院の第一期生)
1971年4月 鹿児島経済大学助手 (1973年3月まで)
1973年4月 鹿児島経済大学講師 (1976年9月まで)
1976年10月 大分大学経済学部助教授 (1980年3月まで)
1980年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授 (1988年12月まで)
1989年1月 大阪外国語大学外国語学部教授 (2003年2月まで)
2000年5月 大阪外国語大学附属図書館長 (2003年2月まで)
2003年3月 大阪外国語大学長 (2004年3月まで)
2004年4月 国立大学法人大阪外国語大学長 (2007年9月まで)
現在 立命館アジア太平洋大学教授 大阪外国語大学名誉教授

(2009. 1. 8 受理)